

令和4年度 佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき  
 <水稲・大豆・果樹・茶>  
 ー大豆病虫害防除ー

<b>Ⅶ 大豆の病虫害防除</b> .....	195
○ 病 害 の 部.....	195
1. <a href="#">紫斑病</a> .....	195
2. <a href="#">べと病</a> .....	196
3. <a href="#">さび病</a> .....	197
4. <a href="#">白絹病</a> .....	197
5. <a href="#">葉焼病</a> .....	197
6. <a href="#">菌核病</a> .....	198
7. <a href="#">黒根腐病</a> .....	199
8. <a href="#">茎疫病</a> .....	199
○ 害 虫 の 部.....	200
1. <a href="#">ハスモンヨトウ</a> .....	200
2. <a href="#">カメムシ類</a> .....	201
3. <a href="#">フタスジヒメハムシ</a> .....	202
4. <a href="#">ミツモンキンウワバ</a> .....	203
5. <a href="#">オオタバコガ</a> .....	203
6. <a href="#">シロイチモジマダラメイガ</a> .....	203
7. <a href="#">ネキリムシ類 (カブラヤガ、タマナヤガ)</a> .....	204
8. <a href="#">ダイズアブラムシ</a> .....	204
9. <a href="#">コガネムシ類</a> .....	204
10. <a href="#">マメハンミョウ</a> .....	205
11. <a href="#">ハダニ類</a> .....	205
<b>&lt;大豆関係の参考資料&gt;</b> .....	207
1. <a href="#">ハスモンヨトウの生態と防除</a> .....	207
2. <a href="#">大豆を加害するカメムシ類の生態</a> .....	209
3. <a href="#">無人航空機による散布農薬登録一覧 (大豆)</a> .....	211
• <a href="#">作用機作による薬剤の分類 (殺虫剤)</a> .....	212
• <a href="#">作用機作による薬剤の分類 (殺菌剤)</a> .....	214
• <a href="#">「農薬登録情報提供システム (農林水産省)」の使用</a> 方法.....	217
• <a href="#">水産動植物への影響に係る使用上の注意事項 (製剤別一覧)</a> .....	219

## Ⅶ 大豆の病虫害防除

### ○ 病害の部

#### 1. 紫斑病 [\[目次に戻る\]](#)

##### 1) 生態

種子伝染の病害であり、葉、莖、さや、子実が侵される。発芽直後の苗立枯の他に莖葉やさやに発病し、さやの表面から子実に侵入発病する。

分生子の形成は17℃以下で著しく阻害されるので、この温度以下での感染は起きないが、病斑拡大や莢、子実への伝染は進展が緩慢になるだけである。子実の発病は、成熟期前10日間の気温が15～24℃の場合に多くなる。

降雨は本病の発生を助長し、収穫前後の降雨の影響は大きく、収穫が遅れると子実での発生は多くなる。近年、莖葉での発病が増加傾向にあり、結実期及び成熟期に雨が多く涼しい天候が続いた場合は、発生が多い傾向である。

##### 2) 防除方法

###### ・耕種的防除

- (1) 健全種子を用いる。
- (2) 被害莖葉はほ場外へ持ち出して処分するか、土中に深くすき込む。
- (3) 適期収穫を行い、できるだけ雨にぬらさないようにする。

###### ・薬剤防除

- (1) 種子消毒

薬剤名 (成分名)	備考
キヒゲン (チウラム)	
ベンレートT水和剤20 (ベノミル・チウラム)	
ホームイ水和剤 (チオファネートメチル・チウラム)	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

- 種子消毒を行うと、本病菌による苗立枯のみならず、他の病原菌による苗立枯にも有効で発芽が良好になる。
- 少量の場合は適当な容器（例えばビニール製肥料袋）の中に本剤と種子を入れ、口をふさぎ、均一に付着するようかく拌する。多量の場合はコンクリートミキサーを使用すると良い。
- 粉衣する際はゴム手袋をし、鼻、ノドを刺激するのでマスクを着用する。
- 粉衣後、長時間おくと発芽不良、発芽遅延がおこるので播種直前に粉衣する。

## (2) 本田期の防除

紫斑病に対する本ぼの防除は、若莢期～子実肥大中期に1～2回程度散布する。

なお、2003年に県内の罹病種子から分離した本病菌の中に、低率ながらベンズイミダゾール系剤（チオファネートメチル、ベノミル）の耐性菌が検出された。

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
スミチオンベルコート粉剤DL (MEP・イミノクタジンアルベシル酸塩)	散布量は生育ステージによって異なる。
トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
トップジンM粉剤DL (チオファネートメチル)	
ベンレート水和剤 (ベノミル)	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

## 2. べ と 病 [\[目次に戻る\]](#)

### 1) 生 態

葉の病徴は、はじめ円形か不正形の淡黄白色の小斑点であるが、病勢が進むと病斑が癒合して不正形の大型褐色病斑となる。病原菌は卵胞子で罹病残さや種子上で越冬し、発芽時に大豆に侵入して、全身発病株を生ずる。全身発病株の葉裏面病斑上に多数の分生子が形成され、空気伝染によって飛散し、2次伝染する。

罹病植物に付いて越冬し、これが発生源と考えられるので連作を避けると共に罹病植物を処分する。

### 2) 防除のねらい

- (1) 密植、多肥栽培による過繁茂は通風を悪くし、発病を助長するので注意する。
- (2) 罹病残さが伝染源として重要である。

### 3) 防除方法

・耕種的防除

- (1) 通風を確保するために過繁茂を抑制する。
- (2) 連作を避ける。
- (3) 罹病植物は集めて処分する。

### 3. さび病 [\[目次に戻る\]](#)

#### 1) 生態

葉、葉柄、茎に発生する。下葉から発生することが多く、若い葉には発生が少ない。生育後期に晴天が続く大豆葉上に朝露が多く、しかも長く残るような条件で発生が多くなる。

#### 2) 防除方法

・耕種的防除

- (1) 連作を避ける。
- (2) フクユタカは抵抗性が強い。

### 4. 白絹病 [\[目次に戻る\]](#)

#### 1) 生態

主として、地際部の茎を侵して腐朽させるため、地上部は黄変、萎ちようして青枯症状となる。罹病株を温室に保つと白色の菌糸を伸長させ、まもなく菌核を形成する。土壌表面や浅い部分で越冬した菌核が伝染源である。高温多湿条件下で発生しやすく、気温が高くなる6月頃から発生が始まり、夏季に向けて進展する。本病菌は腐生性が高いので、多量の有機物施用は本病を多発させる要因となるので注意する。

#### 2) 防除のねらい

- (1) 土壌病害であるため、ほ場衛生に努める。
- (2) 伝染源は菌核であるため、菌核密度を下げる。

#### 3) 防除方法

・耕種的防除

- (1) 本病の菌核は湛水することにより死滅するので、多発ほ場では水稲栽培を行う。
- (2) 除草剤使用などにより雑草の発生を抑える。
- (3) 過度の土寄せは避ける。
- (4) 連作を避ける。

・薬剤防除

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
リゾレックス水和剤 (トルクロホスメチル)	土壌かん注

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

### 5. 葉焼病 [\[目次に戻る\]](#)

#### 1) 生態

主に葉が侵される。発病が激しいときには、葉全体が淡黄色となり全体として葉が焼け

たような症状となる。種子や被害茎葉で越冬し、風雨で運ばれて気孔や傷口から侵入する。風雨は発病を助長する。

## 2) 防除のねらい

- (1) 健全種子を用いる。
- (2) 翌年の発生源となる被害茎葉を処分する。

## 3) 防除方法

・耕種的防除

- (1) 健全種子を用いる。
- (2) 罹病植物は集めて処分する。
- (3) 連作を避け、多発生ほ場では2年以上他の作物を作る。

# 6. 菌核病 [\[目次に戻る\]](#)

## 1) 生態

本病菌は多数の植物に寄生する極めて多犯性の病害である。花卉より侵入した病原菌は、若い莢や葉、葉柄、茎などに侵入して、病斑を形成し、後に多数の菌核を形成する。一般には茎や分枝に淡褐色、水浸状の病斑を生じやがて大型病斑を作る。土壌中での耐久体は菌核である。菌核が発芽して子のう盤が形成され、子のう胞子が飛散し伝搬する。発病適温は、15～20℃であり、多湿条件下で発生しやすい。

## 2) 防除のねらい

- (1) 非宿主植物との輪作を行う。
- (2) 翌年の発生源となる被害茎葉を処分する。

## 3) 防除方法

・耕種的防除

- (1) 種子に菌核が混入しないようにする。
- (2) 本病が多発生したほ場ではイネ科作物を栽培する。
- (3) 罹病植物は集めて処分する。

・薬剤防除

開花初めから7～10日おきに2～3回散布する。特に開花初めから1～2週間以内の防除が重要である。

薬剤名 (成分名)	備考
スミレックス水和剤 (プロシミドン)	
トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
ロブラール水和剤 (イプロジオン)	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻](#)

[末の使用方法参照](#)。

## **7. 黒根腐病** [〔目次に戻る〕](#)

### **1) 生 態**

根及び地際部の茎が侵される。初期の症状は、赤褐色の筋状病斑で、それが、拡大融合して根や地際部全体が赤褐色～紫黒色となる。葉は早期に黄化し重症株では収穫期前に枯死する。罹病株の細根は腐朽し、簡単に引き抜ける。葉が黄化する頃になると茎や主根上にオレンジ～赤色の子のう殻が形成される。

土壌中の菌核が伝染源であり、土壌水分が高くなると発病がひどくなる。土壌温度 15～30℃の範囲ではいずれも発病するが、15℃では症状は軽い。連作によって急速には場全体に蔓延する。

### **2) 防除のねらい**

- (1) 連作をさける。
- (2) ほ場の排水を良くする。
- (3) 罹病残さをほ場に残さない。

### **3) 防除方法**

・耕種的防除

- (1) 罹病残さは集めて処分する。
- (2) 連作を避ける。
- (3) 高畝栽培を行う。

## **8. 茎 疫 病** [〔目次に戻る〕](#)

### **1) 生 態**

生育全般にわたって発生するが、幼苗期の被害が大きい。根部や主茎の地際部ときにはそれより上部の主茎および分枝茎に水浸状の条斑あるいは楕円状の病斑を生ずる。この病斑は、拡大融合して茶褐色または暗褐色の大型病斑となり全体を被い、発病株はしだいに衰弱して、黄化落葉を起こし枯死に至る。

春になって気温が上昇すると卵胞子が発芽して遊走子のうを形成して、降雨とともに遊走子が放出され次作の大豆に感染する。多湿条件下で発生が多く、冠水は発病を助長する。連作により発病は多くなる。

### **2) 防除のねらい**

- (1) 連作を避け、圃場の排水を良くする。
- (2) 罹病残さを圃場に残さない。

### **3) 防除方法**

・耕種的防除

- (1) 罹病残さは集めて処分する。
- (2) 連作を避ける。

## ○ 害虫の部

### 1. ハスモンヨトウ [\[目次に戻る\]](#)

#### 1) 生 態

秋大豆に発生が多く、幼虫が食害する。若齢幼虫は葉肉を食害するため葉が白色化し、中・老齢幼虫は、葉脈を残して葉肉を食害するので、葉が網目状になる。発生量が多い場合は、莢まで食害する。平年では、8月中旬頃から白変葉が現れる。

ハスモンヨトウは気温が高く、降水量（降水日）が少ない年には多発しやすい。

また、ハスモンヨトウの発生地域はカメムシ類と異なり、平坦地域が山麓地域より多発生する。

#### 2) 防除のねらい

大きくなると昼間は物陰に隠れて夜間出て食害するので夕方散布を行う。早期発見、早期防除を行い、多発生を防ぐことが最も重要である。

#### 3) 防除方法

##### ・薬剤防除

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1A	ランネート45DF (メソミル)	カメムシ類との同時防除ができる。
3A	トレボン粉剤DL (エトフェンプロックス)	カメムシ類との同時防除ができる。
3A	トレボン乳剤 (エトフェンプロックス)	カメムシ類との同時防除ができる。
3A	トレボンEW (エトフェンプロックス)	カメムシ類との同時防除ができる。
11A	フローバックDF (BT (生菌))	
15	アタブロン乳剤 (クロルフルアズロン)	
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	
15	ノーモルト乳剤 (テフルベンズロン)	
18	マトリックフロアブル (クロマフェノジド)	
18	ロムダン粉剤DL (テブフェノジド)	
18	ロムダンゾル (テブフェノジド)	
22A	トルネードエースDF (インドキサカルブ)	
UN	プレオフロアブル (ピリダリル)	
28	フェニックス顆粒水和剤 (フルベンジアミド)	
28	フェニックスフロアブル (フルベンジアミド)	
28	プレバソンフロアブル5 (クロラントラニリプロール)	
28	ベネビアOD (シアントラニリプロール)	
28	ペガサスフロアブル (フルベンジアミド)	
30	グレーシア乳剤 (フルキサメタミド)	

- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

#### (ア) 防除上の留意点

- 8月中～下旬頃の白変葉が散見され始める時に1回目の防除を行い、その後は発生量に考慮して10～15日間隔で防除を行う。
- フェロモントラップを設置している地区やほ場においては、8月下旬～9月下旬にフェロモンによる誘殺数が増加するとほ場内の白変葉も増加する傾向がある。従って、フェロモントラップの誘殺数が急増した時に、ほ場での白変葉やハスモンヨトウの発生状況を調査して防除要否を判断する。
- ハスモンヨトウは1回目の適期防除を行っても、その後の追加防除はその年の気象条件やほ場によって異なる。特に、夏期が高温で経過し、大豆の生育が良好な年は、大豆白変葉の観察やフェロモントラップ調査をこまめに行い、防除が必要と判断された場合は、早急に追加防除を行う。
- 農薬が茎葉内部及び着莢部に十分到達するように散布する。

#### (イ) ランネット水和剤の使用上の注意

- ランネット水和剤は毒性が強く、中毒の心配があるので使用にあたっては次のことが義務づけられている。
  - ① 国家検定特級のマスクの着用
  - ② フォームスプレー、ノズルの使用
  - ③ 散布の時だけでなく、開封時、薬剤調合時も特級マスクを使用
  - ④ 疲労や健康がすぐれない人は、散布をさける。
  - ⑤ 中毒の典型的な症状としては、頭痛、吐気、めまい等で、このような症状があらわれたら至急医師の手当を受ける。
  - ⑥ 誤って飲み込んだときは、温食塩水を飲ませてくり返し吐かせる等の応急処置を行う。
  - ⑦ 吸入した時は、その場所から移し寝かせて安静にする。呼吸困難のときは、人工呼吸をする。（ランネットの解毒剤は硫酸アトロピンである。）

## 2. カメムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

### 1) 生 態

アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等の被害が多い。本虫により、さやが吸汁被害を受けると、さやが落下したり種子が奇形になる。大豆の収量・品質に影響を与える重要害虫である。

### 2) 防除のねらい

**防除適期はさやの伸長初期から子実肥大中期である。発生が多い場合には7～10日間隔で2～3回防除を行う。**平坦上部から山麓地域に発生が多いので防除上留意する。雑草が多い地域や山麓地域では特に発生が多いので防除を徹底する。

### 3) 防除方法



・薬剤防除

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
キラップフロアブル (エチプロール)	
スタークル液剤10 (ジノテフラン)	
スタークル粉剤DL (ジノテフラン)	
スミチオン乳剤 (MEP)	
スミトップM粉剤 (MEP・チオファネートメチル)	
ダントツフロアブル (クロチアニジン)	
トレボン乳剤 (エトフェンプロックス)	
トレボン粉剤DL (エトフェンプロックス)	「豆类(種実)」、「えだまめ」で登録
パーマチオン水和剤 (フェンバレレート・MEP)	
MR. ジョーカー粉剤DL (シラフルオフェン)	ミナミアオカメムシに対しては薬剤感受性が低いので注意する

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

### 3. フタスジヒメハムシ [\[目次に戻る\]](#)

#### 1) 生 態

成虫で畑や畦畔の落ち葉や下や草の間で越冬、春先から活動を開始する。成虫は大豆の子葉、葉及び莢を食害し、時には子実を食害して被害粒を発生させる。幼虫は、土中に生息し、大豆の根粒内に潜入し内部を食害する。

#### 2) 防除のねらい

幼虫を防除することで根粒を正常に保ち、大豆の樹勢を維持する。

#### 3) 防除方法

・耕種的防除

大豆の連作を避ける。

・薬剤防除

(1) 種子消毒

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
クルーザーFS30 (チアマトキサム)	塗抹処理で登録

- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

#### 4. ミツモンキンウワバ [\[目次に戻る\]](#)

##### 1) 生 態

秋大豆に発生が多い。発生の時期はハスモンヨトウよりやや早い。1粒ずつ産卵する。初期の被害は表皮を残して葉肉を食害するために葉が白色化するがハスモンヨトウのように目立たない。その後、ハスモンヨトウと同様に葉を食害するが被害はハスモンヨトウより少ない。被害は山麓地域より平坦地域に多い。

#### 5. オオタバコガ [\[目次に戻る\]](#)

##### 1) 生 態

年3～4回世代を繰り返す。卵は1粒ずつ産みつけられる。大豆での被害は、ハスモンヨトウとは異なり、葉が食害されても白変葉とならず、葉や莖を暴食する。また、莢も加害するため、被害は大きい。

幼虫は広食性で、レタス、トマト、ナスなどの野菜類、マメ科作物、花き類など多くの作物を加害する。

##### 2) 防除のねらい

幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が低下するので、若齢期にかけむらがないよう薬剤防除を行う。

#### 6. シロイチモジマダラメイガ [\[目次に戻る\]](#)

##### 1) 生 態

卵は莢ないし莢に近い莖に1粒ずつ産下される。ふ化幼虫は莢内に食入し、子実を食害しながら生長する。秋大豆は夏大豆と比較すると一般に被害は少ない。

##### 2) 防除のねらい

発生が多い地域は肥大開始前の若い莢に薬が良くかかるように散布する。

##### 3) 防除方法

###### ・耕種的防除

秋ダイズはなるべく遅く播く。

###### ・薬剤防除

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
エルサン乳剤 (PAP)	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME >

農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

## 7. ネキリムシ類（カブラヤガ、タマナヤガ）[〔目次に戻る〕](#)

### 1) 生 態

年3回の発生で第1世代は3月から6月、第2世代は6月中旬から8月上旬、第3世代は8月中旬から9月下旬までである。作物の古葉や枯葉に産卵し、生葉への産卵はまれであるために、枯葉の多い麦田跡や休耕地に発生が多い。

### 2) 防除方法

- ・耕種的防除

前作収穫後はほ場内の枯葉等を除去する。

## 8. ダイズアブラムシ [〔目次に戻る〕](#)

### 1) 生 態

アブラムシは生育初期のウイルス病類と媒介と吸汁による被害が大きい。また6月下旬からダイズの未展開葉や若い莢を加害する。特に若莢に群生するときにはマメの成熟を著しく妨げ、品質の低下や減収に結びつく場合もある。

### 2) 防除のねらい

アブラムシの生息する株元まで、薬剤がよくかかるように散布する。また、カメムシ類との同時期防除を基本とする。

### 3) 防除方法

- ・薬剤防除

薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
エルサン乳剤 (PAP)	
トレボン乳剤 (エトフェンプロックス)	カメムシ類との同時防除ができる。

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用法参照](#)）。

## 9. コガネムシ類 [〔目次に戻る〕](#)

### 1) 生 態

主として夏ダイズを加害し、ヒメコガネ、マメコガネ、ドウガネブイブイの3種による被害が大きい。幼虫は土中で根を加害し、生育不良を起こす。畑作地域が水田地域より発生が多い。

### 2) 防除のねらい

7月から8月にかけての被害が大きいので、被害の初期に1～2回防除する。成虫は日中は株元の土中や落葉の中に潜んでいるが、夕暮れとともに葉の上に上がって食害するの

で、防除は夕方に行う。幼虫密度が高いほ場では播種前に薬剤を土壤に処理する。

### 3) 防除方法

- ・耕種的防除  
草丈の高い、毛じの白い品種の被害が大きい。
- ・薬剤防除

薬剤名 (成分名)	備考
ダイアジノン粒剤3 (ダイアジノン)	豆類(種実)で登録 播種時土壌混和 幼虫被害対策

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

## 10. マメハンミョウ [\[目次に戻る\]](#)

### 1) 生態

年1回の発生で7月下旬～9月下旬にかけて秋ダイズに局地的に集中加害する。成虫が葉を網目状に食害し、また花房を食害する。

### 2) 防除方法

- ・薬剤防除

薬剤名 (成分名)	備考
馬拉ソン粉剤3 (馬拉ソン)	

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム\(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用法参照](#))。

## 11. ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

### 1) 生態

ダイズにはナミハダニ、カンザワハダニ、ニセナミハダニなどが寄生する。ハダニは、高温乾燥の条件下で繁殖が盛んになる。また、葉裏に寄生して加害し、高密度に寄生すると黄化して落葉が早くなる。

### 2) 防除方法

- ・薬剤防除

薬剤名 (成分名)	備考
馬拉ソン粉剤3 (馬拉ソン)	

- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#)）。

## 参考資料（大豆）

### 1. ハスモンヨトウの生態と防除 [\[目次に戻る\]](#)

#### 1) ハスモンヨトウの生態

卵塊は大豆の葉裏に産卵される。ふ化幼虫（1令）の体長約5mmだが、脱皮を繰り返し、6令幼虫は約40mmまで成長する。また、体長約10mmまでの若齢幼虫（1～2令）は、集団で生息していることが多い。幼虫は3令頃から分散し、4令以降接食量が著しく多くなる。5～6令幼虫の摂食量は全幼虫期間の96%を占める。各温度における生育速度を、表1～表2に示す。

表1 生育速度1（25℃、16時間照明下、ピーマンで飼育）

卵 期 間	5～7日
幼虫期間（6令）	約24日（7令 28日）
1 令	3.6日
2 令	2.4日
3 令	2.7日
4 令	3.0日
5 令	3.9日
6 令	8.4日
蛹	11～12日
卵～羽化	40～47日
成虫期間	11～14日
産卵前期間	2～3日
産卵数	平均1,600個

表2 生育速度1（テンサイで飼育、宮下，応動昆 1971）

虫 態	発育零点 (℃)	有効積算温度 (日度)	発 育 日 数	
			25℃	30℃
卵	10.1	63.69	4.3日	3.2日
幼虫	10.6	227.27	15.8日	11.7日
前蛹	12.0	27.32	21.0日	1.5日
蛹	9.0	185.19	11.6日	8.8日
卵～羽化	10.3	526.32	35.8日	26.7日

#### 2) 本県におけるハスモンヨトウの発生

##### (1) 大豆における被害

大豆におけるハスモンヨトウの発生は年次変動が大きい（図1）。本虫は、夏季が高温少雨で経過した年に発生が多く、近年では、平成2，6，10，16年に多発生し、大豆の被害も大きかった。このような年は、ハスモンヨトウの餌としての大豆の生育が良好で、ハスモンヨトウの増殖率も高いためである。

(2) フェロモントラップでの誘殺数

フェロモントラップを用いると、成虫の発生量が把握できる。

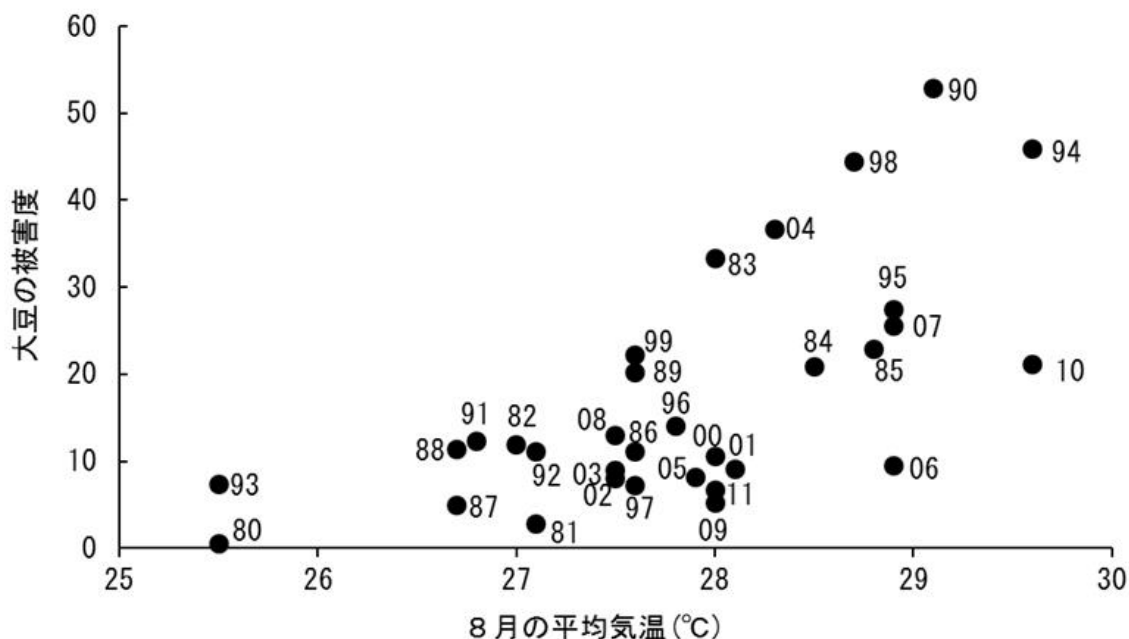


図1 各年次の8月の平均気温とハスモンヨトウによる大豆の被害度との関係

図中の数字は西暦年の末尾2桁を示す。なお、本図では8月の平均気温との関係を示したが、9月の平均気温との関係にも高い相関がみられる。

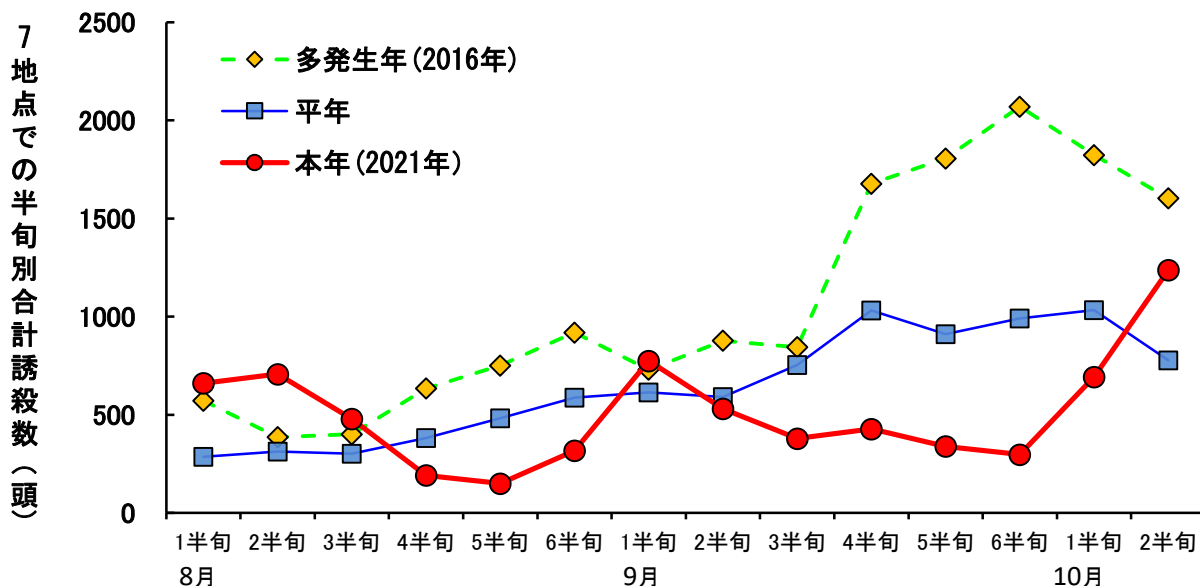


図 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数(10月2半旬まで)  
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内7地点の平均誘殺数(ただし8月4半旬までは8地点の平均誘殺数))

### 3) 防 除

#### (1) 初期防除の重要性

ハスモンヨトウの幼虫は、令が進むと薬剤の効果が上がりにくい(表3)。中老令幼虫になると分散し始め、昼間は株元に生息し、夜間主に食害するため、防除効果がさらに上がりにくくなる。

表3 ハスモンヨトウ幼虫の殺虫剤に対する抵抗性の発育にともなう変化(尾崎, 1975)

令	平均体重 (mg)	LD <sub>50</sub> (μg/1頭)
		ランネート
1	2.2	—
2	9.5	—
3	106.6	0.054
4	214.9	—
5	373.1	0.11
6	757.8	0.22

#### (2) 防除方法

大豆の上位葉に白変葉(若令幼虫群の食害によるかすり状の被害葉)の食害が散見されはじめる時が第1回目の防除適期である。その後は、発生量に考慮して10~15日間隔で防除を行う。防除薬剤は防除基準を参照する。なお中・老令幼虫には、液剤(水和剤、乳剤、フロアブル剤等)が粉剤にくらべ効果が高い。

## 2. 大豆を加害するカメムシ類の生態 [\[目次に戻る\]](#)

### ○アオクサカメムシ

成虫はやや細長い六角形状で、かなり扁平。体色には4型あり、基本型は全体緑色で光沢が少ない。

成虫の状態、日当たりの良い場所の常緑樹の繁った葉の間、日あたりのよい草むらの間や落葉の間などに潜伏して越冬する。年2回程度発生するとみられている。

成・幼虫とも大豆莢中の発育中の種子に口針を挿入して養分を吸収するが、イチモンジカメムシやホソヘリカメムシよりやや遅い発育ステージの種子肥大中期を最も嗜好するようである。

### ○イチモンジカメムシ

成虫はやや細長い楕円形状。体色は淡い黄褐色で、前胸背に淡緑色~白色(雌)または淡紅色(雄)の横帯がある。

成虫の状態、日当たりのよい枯草の茂みの中、落葉の間、常緑樹の茂った葉の間などに潜んで越冬する。年3回程度発生するとみられている。

成・幼虫の大豆への加害時期は種子肥大初期を最も嗜好するようである。

### ○ホソヘリカメムシ

成虫は極めて細長く、扁平ではない。体色は黒褐色から赤褐色まで異変がある。成虫は飛ぶときハチに似て、幼虫は形や行動がアリに似ている。



成虫の状態、日当たりのよい場所の枯草の草むらの間、落葉の間、常緑樹の茂った葉の間などに潜んで越冬する。年2～3回程度発生するとみられている。

成・幼虫の大豆への加害時期は種子肥大初期を最も嗜好するようである。

○ミナミアオカメムシ

成虫はやや細長い六角形状で、かなり扁平。成虫の体色は緑色型、緑色・白色帯型、緑斑型などの多くの色彩異変がある。本種は、成虫で越冬する。越冬場所は比較的乾燥したところを好み、枯れたイネ科植物で覆われた地表面や積み藁の中、常緑樹の樹冠など様々である。越冬成虫は4月上旬頃から活動を始め、麦やナタネ等に産卵を行い、第1世代成虫が6月頃から発生する。その後、マメ科、イネ科植物、ナス科作物（ナス、トマト、ピーマン等）などで繁殖し、秋までに3～4世代を経過する。

○ミナミアオカメムシはアオクサカメムシによく似ているが、①体がやや縦長であること（図3）、②前胸背側角の突出が弱い（なだらかな）こと（図3）、③腹部背面（翅の下の腹板）が緑色（アオクサカメムシは黒色を帯びる）であること（図4）などで見分けることができる。（ミナミアオカメムシの特徴については水稻の参考資料「4. 斑点米の原因となるカメムシ類」（別ファイル）も参照。）

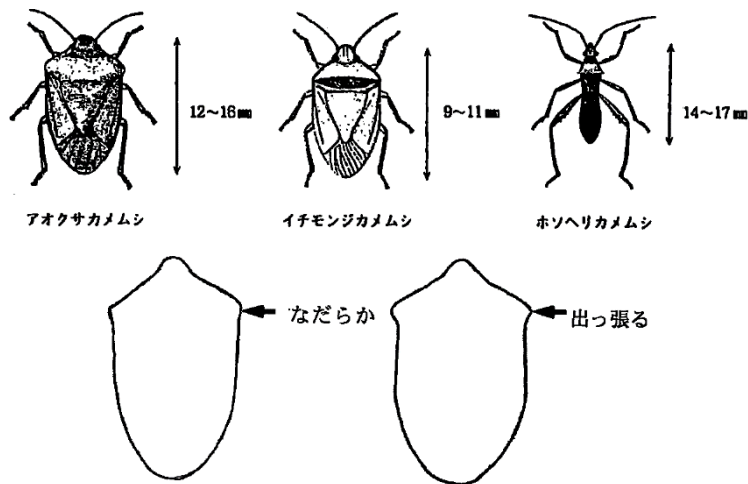


図3 ミナミアオカメムシ（左）とアオクサカメムシ（右）の全体の体型



図4 ミナミアオカメムシの腹部背面（矢印の部分も緑色である）

### 3. 無人航空機による散布農薬登録一覧（大豆）[\[目次に戻る\]](#)

無人航空機で使用できる農薬については、下記のホームページをご参考ください。

- 農林水産航空協会ホームページ <http://mujin-heri.jp/index2.html>

無人航空機でノーモルト乳剤を使用する際の注意事項

- 薬剤を混用する場合は、混用後長時間放置しない。
- ノーモルト乳剤と他剤を混用する場合は、
  - ① 水にノーモルト乳剤を溶かす。
  - ② 次に、希釈倍数の高い順（濃度の薄い順）に薬剤を溶かしていく。
- トレボンエアーと混用する場合は、機械を使ったはげしいかく拌は避ける。

作用機構による殺虫剤の分類 (IRAC 殺虫剤作用機構分類を改変) [\[目次に戻る\]](#)

2020.3月現在

IRAC コード	サブグループあるいは 代表的有効成分	有効成分	農薬名(例) (剤型省略)
1A	カーバメート系	アラニカルブ	オリオン
		ベンフラカルブ	オンコル
		NAC(カルバリル)	デナボン
		カルボスルファン	アドバンテージ、ガゼット
		BPMC(フェノピカルブ)	バッサ
		メソミル	ランネット
		オキサミル	バイデートL
1B	有機リン系	チオジカルブ	
		アセフェート	オルトラン、ジェイエース、ジェネレート、スミフェート
		カズサホス	ラグビー
		クロルピリホス	ダーズバン
		CYAP(シアノホス)	サイアノックス
		ダイアジノン	ダイアジノン
		ジメトエート	ジメトエート
		MEP(フェントロチオン)	スミチオン
		ホスチアゼート	ネマトリン、ガードホープ
		イミシアホス	ネマキック
		イソキサチオン	カルホス、カルモック、ネキリエースK
		マラソン(マラチオン)	マラソン
		DMTP(メチダチオン)	スブラサイド
		PAP(フェントエート)	エルサン
プロフェノホス	エンセダン		
プロチオホス	トクチオン		
2A	環状ジエン有機塩素系		
2B	フェニルピラゾール系 (フィプロール系)	エチプロール	キラップ
		フィプロニル	プリンス
3A	ピレスロイド系 ピレトリン系	アクリナトリン	アーデント
		ピフェントリン	テルスター
		シクロプロトリン	シクロサール
		シフルトリン	バイスロイド
		シハロトリン	サイハロン
		シベルメトリン	アグロスリン、ゲットアウト
		エトフェンプロックス	トレボン
		フェンプロバトリン	ロディー
		フェンバレレート	ハクサップ、パーマチオン、ベジホン等の成分
		フルシトリネート	ベイオフ
		フルバリネート(ε-フルバリネート)	マブリック
		ベルメトリン	アディオン
		シラフルオフエン	MRジョーカー
		テフルトリン	フォース
トラロメトリン	スカウト		
ピレトリン	バイベニカVスプレー		
3B	DDT メトキシシクロル		
4A	ネオニコチノイド系	アセタミプリド	モスピラン
		クロチアニジン	ダントツ、ワンリード
		ジノテフラン	スタークル、アルバリン
		イミダクロプリド	アドマイヤー
		ニテンピラム	ベストガード
		チアクロプリド	バリアード
		チアメキサム	アクタラ、クルーザー
4B	ニコチン		
4C	スルホキシイミン系	スルホキサフロル	エクシード、トランスフォーム
4D	ブテノライド系	フルピラジフロル	シバント
4E	メソイオン系	トリフルメゾピリム	ゼクサロン
5	スピノシン系	スピネトラム	ディアナ
		スピノサド	スピノエース
6	アベルメクチン系 ミルベマイシン系	アバメクチン	アグリメック
		エマメクチン安息香酸塩	アフアーム
		レビメクチン	アニキ
		ミルベメクチン	ミルベノック、コロマイト

IRAC コード	サブグループあるいは 代表的有効成分	有効成分	農薬名(例) (剤型省略)
7A	幼若ホルモン類縁体		
7B	フェノキシカルブ		
7C	ピリプロキシフェン	ピリプロキシフェン	ラノー、プルート
8A	ハロゲン化アルキル系		
8B	クロールピクリン	クロールピクリン	クロールピクリン、ドクロロール、ドジョウピクリン、ク ロピクフロー
8C	フルオライド系		
8D	ホウ酸塩		
8E	吐酒石		
8F	メチルイソチオシアネート ジェネレーター	ダゾメット カーバム	バスアミド、ガスタード NCS、キルパー
9B	ピリジン アゾメチン誘導体	ピメロジン ピリフルキナゾン	チェス コルト
9D	ピロペン系		
10A	クロフェンテジン ヘキシチアゾクス	クロフェンテジン ヘキシチアゾクス	カーラ ニッソラン
10B	エトキサゾール	エトキサゾール	バロック
11A	<i>Bacillus thuringiensis</i> と生 産殺虫タンパク質	<i>B.t. subsp. aizawai</i> <i>B.t. subsp. kurstaki</i>	アイザワイ系統: フローバック、ゼンターリ、クオー ク、サブリーナ、エコマスター、ジャックポット、チュー レックス クルスターキ系統: トアローCT、チューリサイド、 チューンアップ、エスマルク、デルフィン、ファイブス ター、バイオマックス アイザワイ+クルスターキ系統: バシレックス
11B	<i>Bacillus sphaericus</i>		
12A	ジアフェンチウロン	ジアフェンチウロン	ガンバ
12B	有機スズ系殺ダニ剤		
12C	プロバルギット	BPPS(プロバルギット)	オマイト
12D	テトラジホン	テトラジホン	テデオ
13	ピロール系 ジニトロフェノール系 スルフルアミド	クロールフェナピル	コテツ
14	ネライストキシン類縁体	ベンスルタップ カルタップ チオシクラム	ルーバン バダン エビセクト、リーフガード、スクミハンター
15	ベンゾイル尿素系	クロールフルアズロン ジフルベンズロン フルフェノクスロン ルフェヌロン ノバルロン テフルベンズロン	アタブロン デミリン カスケード マッチ カウンター ノーモルト
16	ブプロフェジン	ブプロフェジン	アブロード
17	シロマジン	シロマジン	トリガード
18	ジアシルヒドラジン系	クロマフェノジド メトキシフェノジド テプフェノジド	マトリック ファルコン、ランナー ロムダン
19	アミトラズ	アミトラズ	ダニカット
20A	ヒドラメチルノン		
20B	アセキノシル	アセキノシル	カネマイト
20C	フルアクリピリム	フルアクリピリム	タイタロン
20D	ピフェナゼート	ピフェナゼート	マイトコーネ
21A	METI剤	フェンピロキシメート ピリミジフェン ピリダベン テプフェンピラド トルフェンピラド	ダニトロン マイトクリーン サンマイト ピラニカ ハチハチ
21B	ロテノン		
22A	オキサジアジン系	インドキサカルブ	トルネードエース
22B	セミカルバゾン系	メタフルミゾン	アクセル
23	テトロン酸及びテトラミン酸 誘導体	スピロジクロフェン スピロメシフェン スピロテトラマト	ダニエモン ダニゲッター、クリアザール モベント

IRAC コード	サブグループあるいは 代表的有効成分	有効成分	農薬名(例) (剤型省略)
24A	ホスフィン系		
24B	シアニド		
25A	$\beta$ -ケトニトリル誘導体	シエノピラフェン シフルメトフェン	スターマイト ダニサラバ
25B	カルボキサニリド系	ビフルブミド	ダニコング
28	ジアミド系	クロラントラニプロール シアントラニプロール シクラニプロール フルベンジアミド テトラニプロール	ブレバゾン、サムコル、フェルテラ ベネビア、ベリマーク、エクシレル、パディート、プリ ロツソ テツパン フェニックス
29	フロニカミド	フロニカミド	ウララ
30	メタジアミド系 イソキサゾリン系	プロフラニリド フルキサメタミド	グレーシア
32	GS-オメガ/カッパHXTX- Hv1aペプチド		
34	ミトコンドリア電子伝達系複 合体III阻害剤	フロトキン	ファインセーブフロアブル
UN	アザジラクチン ベンゾキシメート プロモプロピレート キノメチオナート ジコホル ピリダリル 硫黄 石灰硫黄合剤 マンゼブ	キノキサリン系(キノメチオナート)	モレスタン ブレオ 硫黄 石灰硫黄合剤 ジマンダイセン、ペンコゼブ

作用機構による殺菌剤の分類 (FRAC コード表日本版 2021年3月を改変) [\[目次に戻る\]](#)

作用機構	グループ名	有効成分名	農薬名(例) (剤型省略)	耐性菌 発生リスク※注1	FRAC コード
核酸合成代謝	PA殺菌剤 (フェニルアミド類)	メタラキシル	リドミル	高	4
		メタラキシルM	サブデューマックス		
	芳香族ヘテロ環類	ヒドロキシイソキサゾール	タチガレン	知られていない	32
	カルボン酸類	オキソリニック酸	スターナ	中～高	31
細胞骨格と モータータンパク 質	MBC殺菌剤 (メチルベンゾイミダゾール カーバメート)	ベノミル	ベンレート	高	1
		チオファネートメチル	トップジンM		
	N-フェニルカーバメート類	ジエトフェンカルブ	スミブレンド、ゲッター、プ ライアの成分	高	10
	チアゾールカルボキサミド類	エタボキサム	エトフィン	低～中	22
	フェニルウレア類	ペンシクロン	モンセレン	知られていない	20
	ベンズアミド類	フルオピコリド	ジャストフィット、リライア ブルの成分	中	43
呼吸	アリルフェニルケトン類	ピリオフェノン	プロバティ	中	50
	ピリミジニアミン類	ジフルメトリム	ピリカット	知られていない	39
	ピラゾールカルボキサミド類	トルフェンピラド	ハチハチ	知られていない	
	SDHI殺菌剤 (コハク酸脱水素酵素阻害剤)	フルトラニル	モンカット	中～高※注2	7
		フラメピル	リンパー		
		メブロニル	バンタック		
		チフルザミド	グレートム		
		ペンフルフェン	エバーゴル		
		ボスカリド	カンタス		
		ペンチオピラド	アフエット、フルーツセイ パー		
		フルオピラム	オルフィン		
		インピラザム	ネクスター		
		イソフェタミド	ケンジャ		
ピラジフルミド		パレード			
フルキサピロキサド		セルカディス			
インピルフルキサム	カナメ				

作用機構	グループ名	有効成分名	農薬名(例) (剤型省略)	耐性菌 発生リスク※注1	FRAC コード
呼吸	QoI殺菌剤 (Qo阻害剤)	アゾキシストロビン	アミスター	高※注3	11
		ピコキシストロビン	メジャー		
		マンデストロビン	スクレア		
		ピラクロストロビン	ナリア、シグナムの成分		
		クレソキシムメチル	ストロビー		
		トリフロキシストロビン	フリント		
		メミノストロビン	オリブライト、イモチエース		
		ファモキサドン	ホライズンの成分		
		フルオキサストロビン			
		ピリベンカルブ	ファンタジスタ		
	Qii殺菌剤 (Qi阻害剤)	シアゾファミド	ランマン	中～高と推測	21
アミスルブロム		ライメイ、オラクル			
フルアジナム		フロンサイド	低	29	
QoSI殺菌剤 (Qo阻害剤 スチグマテリン結 合タイプ)	アメクトラジン	ザンプロ	中～高と推測	45	
アミノ酸および蛋 白質生合成	AP殺菌剤 (アニリノピリミジン類)	シプロジニル	ユニックス	中	9
		メパニピリム	フルピカ		
	ヘキソピラノシル抗生物質	カスガマイシン	カスミン	中	24
	グルコピラノシル抗生物質	ストレプトマイシン	アグレプト、ストマイ、ヒトマ イシン、マイシン	高	25
テトラサイクリン抗生物質	オキシテトラサイクリン	マイコシールド	高	41	
シグナル伝達	PP殺菌剤 (フェニルピロール類)	フルジオクソニル	セイビアー	低～中	12
	ジカルボキシイミド類	イプロジオン プロシミドン	ロブラール スミレックス	中～高	2
脂質生合成また は輸送/細胞膜 の構造または機 能	ホスホロチオレート類	IBP(イプロベンホス)	キタジンP	低～中	6
	ジチオラン類	イソプロチオラン	フジワン		
	AH殺菌剤(芳香族炭化水素)	トルクロホスメチル	リゾレックス	低～中	14
	カーバメート類	プロパモカルブ塩酸塩	プレビクールN	低～中	28
	OSBPI オキシステロール結合 蛋白質阻害	オキサチアピプロリン	ゾーベック エニケード等	中～高	49
細胞膜のステ ロール生合成	DMI殺菌剤 (脱メチル化阻害剤) (SBI: クラス I)	トリホリン	サブロール	中	3
		フェナリモル	ルピゲン		
		オキシポコナゾールフマ ル酸塩	オーシャイン		
		ペフラゾエート	ヘルシード		
		プロクロラズ	スポルタック		
		トリフルミゾール	トリフミン		
		シプロコナゾール	センチネル		
		ジフェノコナゾール	スコア		
		フェンブコナゾール	インダー、デビュー		
		ヘキサコナゾール	アンビル		
		イミベンコナゾール	マネージ		
		イプロコナゾール	テクリード		
		メコナゾール	ワークアップ		
		ミクロブタニル	ラリー		
		プロピコナゾール	チルト		
		シメコナゾール	サンリット、モンガリット		
		テブコナゾール	シルバキュア、オンリーワ ン		
		テトラコナゾール	サルバトーレ、ホクガード		
	KRI殺菌剤 (ケト還元酵素阻害剤) (SBI: クラスⅢ)	フェンヘキサミド	パスワード	低～中	17
	(SBI: クラスⅣ)	ピリブチカルブ	エイゲン	知られていない	18
細胞壁生合成	ポリオキシシン類	ポリオキシシン	ポリオキシシン	中	19
	CAA殺菌剤 (カルボン酸アミド類)	ジメトモルフ	フェスティバル	低～中	40
		ベンチアバリカルブイソプ ロピル	プロボーズ、ベトファイター 等の成分		
		マンジプロバミド	レーパス		

作用機構	グループ名	有効成分名	農薬名(例) (剤型省略)	耐性菌 発生リスク※注1	FRAC コード
細胞壁のメラニン合成	MBI-R	フサライド	ラブサイド	知られていない	16.1
		ピロキロン	コラトップ		
		トリシクラゾール	ビーム		
	MBI-D	フェノキサニル	アチーブ	中	16.2
MBI-P	トルプロカルブ	サンブラス、ゴウケツ	知られていない	16.3	
宿主植物の抵抗性誘導	ベンゾチアジアゾール(BTH)	アシベンゾラルS-メチル	アクティガード	知られていない	P1
	ベンゾイソチアゾール	プロペナゾール	オリゼメート		P2
	チアジアゾールカルボキサミド	チアジニル	ブイゲット	知られていない	P3
		イソチアニル	スタウト、ルーチン		
	ホスホナート類	ホセチル	アリエッティ	低	P7
	イソチアゾール	ジクロベンチアゾクス	ブーン	知られていない	P8
作用機構不明	シアノアセトアミドオキシム	シモキサニル	カーゼート、ブリザード等の成分	低～中	27
	ベンゼンスルホンアミド類	フルスルファミド	ネビジン、ネビリュウ	知られていない	36
	フェニルアセトアミド	シフルフェナミド	パンチョ、コナケシ	中～高	U6
	チアゾリジン	フルチアニル	ガッテン	中	U13
	ピリミジノンヒドラゾン類	フェリムゾン	ブラシンの成分	知られていない	U14
	4-キノリル酢酸	テブフロキン	トライ	知られていない	U16
	テトラゾリルオキシム	ピカルブトラゾクス	ピシロック、ナエファイン	知られていない	U17
	グルコピラノシル抗生物質	バリダマイシン	バリダシン	知られていない	U18
特定されない	種々	炭酸水素カリウム 炭酸水素ナトリウム 天然物起源	カリグリーン ハーモメイト		NC
多作用点 接触活性	無機化合物(求電子剤)	銅	Zボルドー、コサイド3000等	知られていない	M1
	無機化合物(求電子剤)	硫黄	サルファー、イオウ等		M2
	ジチオカーバメート類および類縁体(求電子剤)	マンゼブ	ジマンダイセン、ベンコゼブ		M3
		マンネブ	エムダイファー		
		プロピネブ	アントラコール		
		チウラム	チウラム、チオノック、トレノックス		
	ジラム	モボクター			
	フタルイミド類(求電子剤)	キャプタン	オーソサイド		M4
	クロロニトリル類(フタロニトリル類) (作用点不明)	TPN(クロロタロニル)	ダコニール、パスポート		M5
	ビスグアニジン類 (細胞膜攪乱剤、界面活性剤)	イミノクタジン酢酸塩	ベフラン		M7
		イミノクタジンアルベシル酸塩	ベルコート		
キノン類(アントラキノン類) (求電子剤)	ジチアノン	デラン	M9		
キノキサリン類(求電子剤)	キノキサリン系	モレスタン	M10		
マレイミド(求電子剤)	フルオリミド	ストライド	M11		
複数の作用機構を有する生物農薬:微生物農薬	微生物 (生存微生物またはその抽出物、代謝物)	バチルス・ズブチリス HB1600 HAI-0404 QST-713 D747	ボトキラー、ボトピカ アグロケア インプレッション エコショット	知られていない	BM2

注1・・・日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会「系統別耐性菌発生リスク(2018年11月5日現在)」より引用

注2・・・系統内で交差耐性がみられない場合がある。

注3・・・ピリベンカルブに対する感受性の低下幅は既存QoI剤と比較して小さい。

## [「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」の使用方法](#)

[\[目次に戻る\]](#)

※現行の農薬登録情報提供システムが、「適用農作物の作物群の見直し」に対応しているかどうか等の最新情報は、本システムのトップページの注意事項等を参照する。

①「農林水産省 農薬登録情報提供システム」で検索し、表題のタイトルのホームページを開くと、下の画面が出ます。「農薬名で探す」のボタンをクリックします。

※作物名や、病害虫名、有効成分名からも検索できます（説明省略）。



②検索したい農薬名を入力し、「検索する」をクリックします。



③ 検索したい農薬の「登録番号」をクリックします。

検索結果

登録番号 ▲	農薬の種類 △	農薬の名称 △	製剤毒性	作物名称	病害虫・雑草名称
> 24185 ③	フルキサメタミド乳 剤	グレーシア乳剤	普	-	-

④ 画面下部の「適用表情報」に、適用作物ごとの希釈倍数・使用時期・使用回数等が表示されるので、内容を確認します。

適用表情報

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルキサメタミドを含む農薬の総使用回数
さといも	ハスモンヨトウ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
かんしょ	ナカジロシタバ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
かんしょ	ハスモンヨトウ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
かんしょ	コナジラミ類	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
かんしょ	ハダニ類	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
だいごん	コナガ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
だいごん	アオムシ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
だいごん	ハイマダラノメイガ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
だいごん	カブラハバチ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
だいごん	キスジノミハムシ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
はくさい	コナガ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
はくさい	アオムシ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内
はくさい	ハスモンヨトウ	2000~3000倍	100~300L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	2回以内

[\[目次に戻る\]](#)

## 水産動植物への影響に係る使用上の注意事項(製剤別一覧) [\[目次に戻る\]](#)

各薬剤の水産動植物への影響に係る使用上の注意事項については、下記 [FAMIC ホームページ](#) (HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報) の、① (エクセル版) または② (PDF) をダウンロードしてご確認ください。

※①、②のアドレスは更新のたびに変わります

▶ 肥料・土壌改良資材	▶ 農薬	▶ 飼料	▶ ペットフード	▶ 食品表示・JAS規格等
-------------	------	------	----------	---------------

[HOME](#) > [農薬](#) > [登録・失効農薬情報](#)

農林水産消費安全技術センターについて

公表事項

田 調達情報

田 採用情報

田 広報・資料等

田 行事・講習会等

ISO・Codex・国際協力 関連情報

OIE Collaborating Centre

メールマガジン

田 本部・地域センター

### ▶ 登録・失効農薬情報

このホームページでは登録農薬有効成分の毒性・水産動植物に対する影響に係る情報、用途別登録農薬の概要、失効有効成分及び失効農薬の一覧を掲載しております。(2015年6月30日現在)

情報の更新は原則として月初に行います。更新予定日が祝日や休日と重なる場合、当センターサーバーメンテナンスと重なる場合等は、情報の更新が多少前後することがありますので、ご了承願います。

なお、農薬の使用方法を詳しく検索される方は、[農薬登録情報提供システム](#)をご利用ください。

#### ▶ 登録農薬について

- 1. 登録有効成分一覧(有効成分名、用途、毒性・水産動植物に対する影響)を掲載しております。  
※登録農薬有効成分の表示形式が変わりました。

登録農薬有効成分の毒性・水産動植物に対する影響 (PDF:296KB) ,エクセル版は[こちら \(LZH:35KB\)](#)

※水産動植物への影響に係る使用上の注意事項(製剤別一覧)は [エクセル版はこちら \(LZH:312KB\)](#)、[PDF版はこちら \(PDF:1.7MB\)](#) からダウンロードできます。

①

②